

特別企画委員会

委員長 河野雄二

企画提案の経緯

平成29年8月29日に「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」報告書が公表され、附属学校の改革は待たなしの状況となっている。

平成29年11月24日には第1回「これからの附属学校のあり方を考える協議会」を開催し、改革を進める先進事例の報告を行った。その後、地区別勉強会での個別相談が各地区で進み、また平成30年6月2日には、連盟総会に合わせ「附属学校連絡協議会（第2回これからの附属学校の在り方を考える協議会）」を開催し、改革の先進事例を紹介した。これまでの取り組みで附属学校改革への機運は高まってきたと思われるが、それをさらに高めるべく今年度は第3回「これからの附属学校の在り方を考える協議会」と「地区別勉強会」の2つの企画を提案した。

活動報告

○第3回「これからの附属学校の在り方を考える協議会」

日時 平成30年11月24日(土)

場所 お茶の水女子大学講堂

共催 日本教育大学協会

後援 全国国立大学附属学校PTA連合会

協力 文部科学省

内容

【説明】

文部科学省総合教育政策局教育人材政策課
教員養成企画室長 高田 行紀

【講演1】

「教育実践をリードする附属学校に期待したいこと」

上越教育大学学校教育研究科教育実践高度化
専攻(教職大学院)教授 水落 芳明

【講演2】

「魅力ある組織を創るためのリーダーの役割」
島根大学教育学部附属学校園校長

齋藤 英明

【パネルディスカッション】

「これからの附属学校に求めること」

(パネリスト)

文部科学省総合教育政策局

教育人材政策課長

柳澤 好治

上越教育大学学校教育研究科教育実践高度化

専攻(教職大学院)教授

水落 芳明

島根大学教育学部附属学校園校長

齋藤 英明

【挨拶】

「ステークホルダーとして、これからの附属学校に求めること」

全国国立大学附属学校PTA連合会会長

呉本 啓郎

○地区別勉強会

開催地区

- ・九州地区(大分)
- ・関東地区(宇都宮)
- ・北海道地区(釧路)
- ・東海地区(岐阜)
- ・東北地区(山形)
- ・四国地区(香川)

今年度は、上記6地区で開催した。

総括

○第3回これからの附属学校の在り方を考える協議会について

総論

大学教職員51名・附属学校教職員209名・PTA連合会30名、計290名の参加があった。

内容は文部科学省説明・講演2本・パネルディスカッションで構成した。アンケート結果によ

ると、4段階評価で文部科学省説明3.3、講演3.7、パネルディスカッション3.6と高評価であった。参加者のニーズと内容がマッチしており、今後の附属学校の在り方について考えるよい機会になったと考える。また、来年度も開催してほしい等の意見もあった。参加者数・アンケート結果から附属改革への関心が高いことの表れだと考える。

開催日程については、年度途中で提起した企画であったため学校現場の年間計画に位置づけられておらず、既に決まっていた行事と重なったところもあったことと思われる。そのため来年度の連盟協議会は、本年度中に基本方針を提起することにした。来年度は6月1日(土)と11月23日(土)に開催する予定である。

課題

・現場の年度期間(4月から3月)と連盟役員の任期(6月から5月)がずれていることによる連携の不具合

課題① 第3回協議会の期日を11月24日(土)としたが、その期日の設定については課題が残った。新連盟役員が6月2日(土)附属学校連盟総会で承認されてから今年度の活動が始まるため、学校現場では当然のことながら各大学・学部・附属学校の年間行事に本協議会を予定に入れていない。また、開催に向け調整が整い文書発送をしたのは9月であり、11月の開催まで期間が少なかった。

課題② 連盟の年間総括が4月の役員会・理事会であり、3月に異動する役員が参加できない。

次年度への改善点

・課題①については、来年度の協議会や勉強会について方針を今年度中に決めておき、来年度役員へ引き継ぐ。2019年度の協議会は6月1日(土)、11月23日(土)の2回開催することを2018年11月の連盟理事会で決定済。連盟事務局より、来年度の行事予定に付け加えて今年度中に

周知済。

・課題②については、4月に開催していた理事会を3月に変更した。(11月16日(金)の理事会で承認済)

・その他。開催にかかるデータを全附連事務局に保管し、次回の開催に役立てる。

○地区別勉強会について

総論

「第3回これからの附属学校の在り方を考える協議会」と同じ文書で「地区別勉強会」を9月に提案した。今年度6地区で開催と昨年度より開催地が増えている。それぞれの地区での関心・意識が高まっていると思われる。

PTAや後援会も含めた関係者が文部科学省・全附連・全附P連関係者と相談できる会は他になく、今後もこの企画を附属学校園の改革に活用してもらいたい。

課題

・開催に関するデータがなく、どのように計画すればよいかイメージがわきにくかった。

次年度への改善点

開催にかかるデータを全附連事務局に保管し、次回・他地区での開催に役立てる。

資料

○第3回これからの附属学校の在り方を考える協議会

参加者数

大学教職員	51名
附属学校教職員	209名
PTA 連合会	30名
計	290名

アンケート結果(4段階評価)

1 文部科学省説明は有効だったか	3.3
2 講演は有効だったか	3.7
3 パネルディスカッションは有効だったか	3.6

アンケート自由記述 (抜粋)

1 文部科学省説明について

○最新情報が収集できた。

2 講演について

○改革のビジョンが見えてきた。

○エビデンス・データの必要性を学んだ。

○講師のリーダーシップを見習いたい。

▲さらに詳しく焦点化した内容・事例の紹介がほしい。

▲幼・小・中一貫や市町・県教育委員会との連携の事例を知りたい。

3 パネルディスカッションについて

○キーワードを示したパネルディスカッションもよかった。エビデンスの大切さもよくわかった。

○パネルに質問票で参加できるのはとても良い。さらに情報共有と意見交換ができればよい。

▲分科会形式で各校の取組について交流（情報交換）があってもいいのでは。次回は参加者同士で情報交換できる時間もあるといい。

▲パネルディスカッションの内容が深まるとよかった。でもパネルディスカッションは続けていけば有効だと思う。

その他

○やってみて効果的かどうかなど試行のできる場は附属しかないと思った。

○このような協議会は大切だと思う。毎年協議会を開催してほしい。

○来年は校長・副校長と一緒に来たい。

○元気が出た。勇気をもらった。大学・学部・教育委員会との関係づくりの重要性に改めて気付いた。

▲公立学校のモデルというとき、何のモデルなのかを明確にすべきだ。